

## 第13回これからの北海道立近代美術館検討会議 議事録

日時 令和6年(2024年)7月11日(木) 10時45分~12時00分

場所 Web会議システムZoom

出席者 別添「出席者名簿」のとおり

議題 1 近代美術館の整備方法について  
2 その他

### 議事

(1) 議題1 近代美術館の整備方法について

ア 事務局から資料1、2に基づき説明

(特記事項)

・なし

イ 質疑応答等 (有・無)

(事務局)

近美の整備方法について、現在の検討状況としては、先ほど事務局から説明したとおり、先の道議会で、近美の整備方法の検討に当たっては、「基本構想の中間報告に掲げる目指す姿の実現を最優先に、道民や有識者の皆様からの御意見を参考にしながら、公館を含むエリア全体の活用構想との整合性を図る。」と答弁している。

また、知事からは、エリア全体は「芸術文化や本道の歴史を身近に体感できる拠点とし、商業的な目的をもって開発するのではなく、みどり豊かな自然環境を維持しつつ誰もが心地よく過ごせる交流と憩いの空間とする。」と答弁している。

事務局からの資料説明のとおり、他の公立美術館においては、新築では当然だが、既存の建物を改修した場合でも、新たな機能の追加により、時代にあった美術館へ刷新した例があり、そうした美術館の事例も参考にした上で、整備方法について委員の皆様の御意見をお伺いしたい。

前回の会議で、菊地委員からは「既存の近美を改修し活かしながら、不足している機能を新しく造る案もあるのでは。」との御意見をいただいているが、整備の考え方など、改めて御意見をいただきたい。

(菊地委員)

環境的な側面で言うと、日本以上に海外の方が先進的な取組が沢山ある。使えるものはできる限り活かしていくことが基本的な考え方。最優先事項は、基本方針の実現だが、活かせるものは活かしていく。

デザインの力を使えば、古い建物でも十分魅力的なものに変わらなると思っている。現在経営している施設の中にも、築50年程度の古い旅館を新しく宿泊施設に改修したものがあるが、構造を変えなくても、全く新しい施設に生まれ変わっている。

新しくアートギャラリーもオープンさせたが、そこも古いスーパーマーケットの鉄骨フレームをそのまま利用して、新しくアトリエにしている。お客様の中には、新築だと思われる方も多く、構造を活かして全く違うデザインの新しい建物は十分造ることができる。

基本的には、環境のことを配慮するのであれば、既存の施設をできる限り活かし、不足しているものを付け加える等して、公園や駐車場などとシームレスにつなげることで、より魅力的なワクワクする美術館にしていけることが考えられる。

既存の近美を活かしていくことについては賛成。

(事務局)

佐藤委員からも、知事公館エリアとの連携や機能の分担について、御意見をいただいていたが、いかがか？

(佐藤委員)

他の公立美術館の事例を出してもらい、参考になるのではないかなと思う。それから、知事公館エリアを含めてアートゾーンとして一体化して考えていくという知事の回答に安心している。

具体的な整備のことについて、これまで私自身、長くここで勤務したことがあり、それを基にして、あるべき姿を実現する為にはどうしたらいいのか、と考えていくと、率直に言うところとちょっと面積的に足りないという感じがする。例えば、今一番問題になっている収蔵や保管の関係で言うと、現地改修案であっても増築ということになるので、ある程度十分な面積をあてがえば解決するのだろうと思うが、どのぐらいの年数が想定されるのかとか、収蔵庫だけではなくて、展示用具室の問題とか収蔵庫の前に、整備や写真撮影をするための前室があるが、ここもやっぱり足りないと思う。それから作品を開梱したり梱包したりする荷解室というのがありますが、ここもたいへん狭く、苦労した記憶がある。

それから、特別展用の梱包ケースをどうやって保管するか、これも結構頭を抱えることが多かった。それからトラックヤードもかなり狭く、作品の搬出入に苦労した。

つまり、こういった細かな問題が結構あり、単なる収蔵庫の増設をすれば良いということではないということも、気にかかっているところ。

それから、展示室についても、現在は2,800㎡位あり、結構スペースはあるが、全国の公立美術館の平均から言えば1,000㎡位足りない。それはそれでいいが、例えば天井高が不足しているとか、フレキシブルな展示が難しいとか、今回の鳥獣戯画展はよくやっているが、不足する部分があるし、それから現代的な表現への対応がどこまでできるか、ということも気になるところ。

それから休館中でも観覧できる常設展示スペースもあつたらいいのではないかと、という声もあつたと思う。コラボレーションということから言えば、コラボレーションルームみたいな部屋を作って、連携企画の展示スペースを作るなど、仮の話だが、そんなことも考えられるかもしれない。

コンセプトを実現するために施設面で問題になるのは、ウィズキッズだとかコラボレーション、リサーチの部分。特にウィズキッズでは、さまざまなワークショップだとか、学校との連携、また子どもの視線に立った展示をするとか、いろいろなことが整備計画に書かれてあつたが、今の近美の造型室、映像室だけでは、やっぱり無理。これまでロビーを使ったりして様々な子どもの為の活動をしてきた。他館では整備の中で、ちゃんとキッズスペースを設けており、これを新設することが必要なのかなという気がするし、子どものための展示室も考慮すべきかもしれない。

コラボレーションでいくと、どういう活動がされるか、もう少し詳しく具体的ににならないと分からないが、様々なワークショップもあるだろうし、そのための多機能なフリースペースがあつていいのかなと思う。東京都現代美術館がアートコミュニケーションプログラムということをやっているが、例えばこのように大規模にやるのであれば、それに伴う施設設備も必要になってくると思うし、ボランティアとの連携ということから言えば、ボランティアの控え室がなく、現在、造型室だとか映像室を兼用しているという問題もある。

もっと細かなことを言うと、今開催している展覧会もそうだが、実行委員会形式で行う場合、共催者が事務室を置く準備室が狭い。それから監視員の為の控え室も実は無く、これも確か造型室等を併用しているのではないかなと思う。

このように細かく考えていくと、整備の段階でこれらの面積等をしっかり考慮していくべきではないかなと思う。ただ、現地改修の場合、面積に対する工夫の余地がどこまであるのか、ということも考えなくては行けない。例えば、現在の講堂は、かなり天井が高く、傾斜もきつい。そこに床を作って、上下に分けることによって、スペースを生み出して、ということもあるだろうし、地下の機械室にあるボイラーが更新されれば、部屋は小さくなるため、その地下の部分を利用していくという手もあるかなと思ったりする。地下の駐車場なんかも考えられるかもしれない。

菊地委員のお話で、ハイブリッド案のようなものがあつたが、レストランとかミュージアムショップ、駐車場などを、知事公邸の方に持っていくことができるのであれば、そのスペースを、今ある幼児室を吸収する形で色々な活動ができるキッズスペースにすることも可能だろうと思う。それが無理であれば、キッズスペースは外に持っていく、ということもあるかもしれない。

ともあれ、具体的にどのような活動が想定されるのか、そのための施設設備は、今の近美ではどこまで足りて、どこまで足りないのか、ということをもうちょっと突っ込んで考えていけば、自ずと、新築する場合にも、この程度の諸室なり展示室が必要だ、ということが見えてくるし、改修の場合はどの程度増設していくのか、工夫してどの程度諸室を有効利用できるのかということも見えてくる。もうちょっと突っ込んだ具体的な活動、それに対応する施設、ということを考えていく必要があるのではないかな。

リノベーションをする場合、本当にデザインの力はものすごく大きくて、活動とスペースをトータルに結ぶ

優れたデザインを大いに発揮できるようになればと思う。

また、気になることがあって、今ホールにブルデルの「力」というモニュメントがあるが、あれをどうするのか、ということ。それから野外にある新宮晋や本郷新などの作品をどうするのか、ということもある。改修でこの建物を用いる場合には、新しいコミッションワーク、コミッションアートといったものによってスペースを魅力的にしていける、ということも考えられるのではないだろうか。

それから、ロビーやホールの広々とした空間などは評判が良いので、そういうものを生かしていくことも考えながら、自然環境などを含めていろいろ整備していくべきだろうと思う。

(事務局)

北村委員からは、「ワクワクする美術館をつくりたい。」「改修案ではワクワク度が低い。」との御意見をいただいていたが、誰もがワクワクする美術館とするために、どのような視点を大事にしていくべきか。

(北村委員)

改修の場合は、収蔵庫は増えるとしても、基本的に面積は大きく増えない。もし新しい部屋を作るとしたら、むしろ減るかもしれないと危惧するところもある。9,160㎡という今の近美の延床面積は、他と比べ広いという訳でもないように思える。京セラ美術館が改修した際はドラスティックに変えた。デザインでどこまでできるかはやってみないと分からないが、根本的に変えなければいけない。

ただ単にデジタル技術で新しい照明に変えても、小手先の目新しいものは、新しくしたその時は新しいと思っても、数年後にすぐ古くなってしまっているので、留意しながら考えて欲しい。

また、ワクワク感については、美術館の方でも道民へのアンケートの実施やワークショップの実施などにより周知に努められており、ご意見は大変貴重だと思うが、果たしてどれほどの方が自分たちの美術館として、当事者意識を持っているか。「私たちがこの美術館をつくる」という期待値のようなものはあまり感じられない。例えば50年前にこの美術館ができた時の、期成会のようなものができて、道民の運動としてこの美術館が建てられたような機運の盛り上がりがあり、まだ感じられない。ワクワクするのは誰かということ道民。作品展示の問題で本物を飾り続けることはできないかもしれないが、岩橋英遠の長尺の作品が常設で見ることができたり、鳥獣戯画のレプリカのようなものを作って、エントランスに飾り、常に見ることができるようにする。そのためには、例えば、道民だけに限らず、皆さんにクラウドファンディングで参加してもらおうなどの工夫をすると、「この美術館は私たちが作っていく美術館である」という思いが、道民の皆様の中でもっと強く湧き上がってくるようなことが、ワクワク感に繋がってくる。

既存の美術館にするか、新設するかについて、私は前回、A案はワクワク度が低いと申し上げたが、どの整備方法になった場合でも、既存建物の取扱いをどうするかについては決まっていないということが、今までの議論で出ている。この建物を道民が使える形で、例えば企業とのタイアップや、市民ギャラリーはあるが道民のギャラリーがないので道民ギャラリーとしての活用、札幌市では長い間懸念となっている自然史博物館の設置との兼ね合い等、どのように活かすのかを並行して考え、エリア全体を芸術、文化、博物、歴史、憩いの公園、観光、食事などによって、賑わいを作る。あるいは、観光客が多くなっているが、アドベンチャー旅行等、集客できるようなエリアにするために、まだまだ考えていけるのでは。

道民が当事者ということを知ってもらい、ワクワク感を高めていく必要があることを考えると、やはりA案はワクワク度が低いと思う。

(事務局)

佐々木幸委員からは、前回、「C案は細長い敷地で制約された構造になるのではないか」という指摘をいただいているが、改めてどのような視点を大事に検討を進めるべきか御意見をいただきたい。

(佐々木幸委員)

前回の資料や他の委員の発言を踏まえても、やはり難しい問題。

知事公館エリアの土地を利用する場合、かなり細長い土地で新築することになるが、変則的な敷地の中でどんなことができるか考えていたが、建築の工夫で様々なことができるのだろうと思った。

資料2において面積の話があったが、様々なコンセプトを実現するために、様々な機能を盛り付けようとする中で、現施設の面積では足りないのか、あるいは増やすのであれば、どの程度増やせば実現できるのか判断がつかない。近代美術館の延床面積9,160㎡が、資料で挙げている事例の中では、さほど広くもないのかなと感じてしまう。

改修、移転新築、現地新築と様々な整備方法がある中で、どの方法を選べば良いのかと考えたときに、経済的な部分を言うのであれば、もちろん今の建物を活かしていく形になるかと思うが、その場合、今ある建物の構造上の制約を受けるのか。要するにゼロにリセットして新しく何かを考えていく、あるいは今の建物を改修した場合に、今の建物の構造上ここはどうしても避けられない部分であるとか、望んでいることができないという制約が中々見えないということがあるため、その点を踏まえ議論していかなければ、整備方法の選択が難しい。

先週、出張でシンガポールに行ったが、シンガポールはとにかく何か壊して新しいものを造っていくというような国。2015年にオープンした「ナショナルギャラリーシンガポール」という、おそらく東南アジアで最大級のコレクションを持っている一番大きい美術館は、裁判所と市庁舎の建物をリノベートして大きな美術館に変えたもので、建物を全部壊して新しくしまうのではなく、国民の象徴的な既存建物を使って美術館に変えていくという点が非常に上手く、今ある建物を上手く活かしたという視点がすごく参考になる。

また、ナショナルギャラリーシンガポールは当然、文化資源であると同時に観光資源にしているため、観光客が沢山来る。見せ方や運営の仕方が非常に上手い。なおかつ、私が取材した際は、シンガポールユースフェスティバルの中で、中学校の子どもたちが文化祭の展覧会を実施しており、地元の人も上手く使えるように工夫している。特に私は教育面でかなり期待しているため、ソフト面やどのように運営するかを踏まえて、美術館の機能を考える必要がある。改修する場合は、このような機能をこのように展開できるという具体案があると比較しやすい。

また、ウィズ・キッズの部分が資料で前面に出されており、とても大事なことだと思う。しかし、学校にいる子どもたちには美術という機会が提供されるが、何年前かに教育大釧路校の学生が調査した結果を見ると、一番美術から離れていくのは、学校を卒業して働いている、美術と縁が切れてしまった若年層。逆に子育てが終わって余裕ができたシニア層は美術館に戻ってくる。この若年層をいかに呼び込むか、つまり学校教育の延長上に社会教育があるという構造を実現する上で、とても大事なこと。若年層を上手く呼び込めるような場所、若い人たちが煙たがるような、ファインアートの敷居の高い部分もあっていいが、倉庫にある古い美術作品だけではなく、開放的で様々な情報にアクセスでき、若年層が同時代的に感じることができるアートや楽しむことができるコンセプトも、今回のリニューアルの中に含めてもらえれば良い。

それぞれのコンセプトが、改修、移転新築、現地新築の中で、現実的にどう活かすことができ、逆にどのような制約を受けるのか。特に改修の場合は、現在の建物の構造や場所の観点から受けざるを得ない制約や、新築する場合のデメリットを含めて議論していかないと、中々答えが出にくいと思う。

(事務局)

佐々木亨委員からは、前回、大規模改修のリニューアルをきっかけに、その後の活動が活発になって評価されている美術館の例をご紹介いただいた。また、「ソフト面に基づいたハードの整備という議論が大事。」との御意見もいただいている。改めて、整備方法を検討していく上で、大事な視点について御意見をいただきました。

(佐々木亨委員)

資料1についての補足を3点。

新たな経済波及効果が生まれる、仮想評価法による市場を通らない価値の数値化が大事ではないか、と前回の会議でお伝えしたところ。

現在別のプロジェクトで大阪市立自然史博物館の、市場を通らない価値の数値化を仮想評価法により出している。例えば、大阪の誇り、市民の自然史教育の拠点になっているなど。

これらはお金には現れるものではないが、もし建物が無くなったとき、あなたはどれくらいの寄付をするか、といった調査をした結果、1度の寄付で22億円程度の市場を通らない価値があると算定された。これと、市場を通る経済価値、経済波及効果も現れてくると考えられる。

ランニングコストについては、経済波及や市場を通らない価値で十分カバーできるだけのリターンを見込めるはず。そのため、全体の議論でイニシャル、ランニングのコストの大小で、議論をする意味はないのではないかと思う。

2点目は、ワクワク感について。非常に大事なことだが、ハード面でカバーできるワクワク感は、3年から5年程度で色あせるので、ワクワク感を支えるのはソフト面だと思われる。

博物館体験という本で、一人一人の来館者にとって価値のあるミュージアム体験を生み出すには、個人的、社会的、物理的な3つのコンテクスト（利用者や事象の意図、状況が存在する背景等）が必要であるとされて

いる。個人的コンテクストは、元々知っている作品や作家、興味がある展示があるという個人の知識、経験。社会的コンテクストは、誰と一緒にいったか、どんなスタッフやボランティアと接したか、どんなツアーに参加したか。物理的コンテクストは、展示されている作品や空間構成、演出と言ったハードに関すること。

今までの議論は物理的コンテクストの部分が多かったが、やはり、社会的コンテクストの、誰と接して、どんな豊かな体験をしたのかが、ワクワク感を長続きさせるために、大事な要素なのではないか。

今まであまり手を付けてこなかった、ウィズキッズやコラボレーションなども、これからワークショップなどを行うことで、若い人が来られるようにする、多機能のフリースペースを使ったり、ボランティアと連携してより活発にしていくなど、目指す姿を実現するための取組が、社会的コンテクストを広げていくための大事な要素になる。

どこが足りなからできない、どういう制約があるからできない、という話はしているが、近美や道教委として、まずは新しくなった美術館で具体的に何をやるのかを出さないと、議論が進まないのではないかと。リニューアルを進める段階から、リニューアル後はこういったプランでこの部屋をこうして使う、といった案を出しながら議論を進めるのが普通だが、現在は具体的な案が出ていないため、議論が進まない要因になっていると思う。

北海道博物館がリニューアルした際に様々な部屋が出来たが、それらを使うための機能や、それを回すための組織、新しい役職やスタッフのトレーニングを実施するなどのソフトウェアがないと、作られた後も使われない。事前に何年もかけて準備をしておかなければならないと、ハードウェアの建築ができあがっても、使われない状況が起ってしまう。

ウィズキッズやコラボレーションのプランを明確に出すべきではないか。それができないのなら、経済的価値で比較、議論することはしょうがない。美術館、道教委も説得力のある案を出してもらいたい。

3点目は、移転新築の話の際に出てきたネイチャーポジティブの考え方について、北大の先生に話を聞いたが、この考え方は当然のことで、何百本も木を伐採するのであれば、代替地の確保であったり、周辺住民の理解を得た上で進めなければ大変なことになるとのこと。北大キャンパス内にも新しい建物を建てているが、ネイチャーポジティブの考えを使って、代替地の確保についてしっかり議論して進めている。

(事務局)

ソフトが先あって、それを実践するためのハードの議論がないというのは感じているところ。

現近美の構造や面積の中で、考えたソフト面を実現できるのか、どういった増設、増築が可能なのかといった技術的な確認がまだできていない。

議会議論でも、現在の近美の改修案に必要な機能や安全面は確保できるのか、建設業者などの専門家に確認を取るべきではないかといった議論もあったところであり、今後、確認を進める予定。改修案でどういったことが可能なのか、確認をとった内容を踏まえ、今後お示ししていきたい。

建物の建て替え、改修などの世界での事例や環境面との関係などについて、最近の動向を教えていただきたい。

(菊地委員)

アメリカだと環境影響評価が日本よりも進んでいる。戦略的環境アセスメントと言われるが、環境的側面で議論して建物を建てており、それが大きな制約条件にもなっている。環境に配慮した建築が様々あるが、博物館や美術館が制約条件を理由に本来の目的を達成できない、妥協しないといけないといったものではなく、環境を配慮することによって、建築も魅力的になるという事例が多くある。

米国ではないが、例えば英国のARUP社が設計しているような建築などに、環境に配慮した魅力的な事例が沢山ある。それだけを参考にすべきというものではないが、美術館や北海道の関係者がもっと自分がワクワクするような世界の事例を調べて、自分達がやっていくことのイメージやアイデアを見つけられれば、具体的な議論ができるのではないかとと思う。

(事務局)

前回会議でも現在の近美の建物に文化的な価値があるという御意見をいただいたが、現地新築というリニューアル案もある。今の建物を活用するのかについて、お考えをお伺いしたい。

(北村委員)

私は北海道の文化財保護審議会の委員をしているが、先日の委員会の時に、白井晟一氏の設計による石造り

の築50年ぐらいの建物が登録になった。近代美術館も築50年ほどなので登録の対象になり、とても特徴的な建物であるため、文化財としても認められていく可能性が高いことを考えると、近代美術館を解体して新築するというB案は無理かなと思っている。

(佐藤委員)

ある建築家と話をしたことあるが、今のこの美術館をリノベーションするとした時に、ものすごく意欲が湧く、というようなことを言っていた。もちろん構造上の問題とか、耐久性がどこまで保持されるのかという事は、前にチェックしたとは思いますが、そういった事がクリアされるのであれば、チャレンジする建築家は結構いるのではないかなと思う。建築家による改修の興味というのも、実は潜在的にあるということを紹介しておきたいと思う。

そういうことを踏まえると、新築というよりも、できるだけ現在の近美を残すというようなことを前提にして考えてもいいのかなという気がする。新築と言っても、ではどのぐらいの規模でどのような設備を備えたものなのか、ということは現在では全然見えない。その辺のところが見えないと、整備と言っても、そのイメージが湧かないのではないかな。

(佐々木幸委員)

文化財として残すのか、美術館の機能を維持したまま残すかについては色々議論があると思うが、基本的には文化財としての価値があるのであれば、取り壊さないでそのまま残すという考え方で良い。整備方法それぞれの選択肢において、実際にどんなことができるのかが中々見えない中で考えていくのは難しいが、仮に移転新築だとしても、建物そのものが文化財としての価値があるのであれば、現在の近代美術館の建物は残すべき。現在の建物を壊して、今の建物がある土地に新しく建て直す現地新築は、選択肢から除外してもいいと考える。

(佐々木亨委員)

休館期間が4年程度と長い。その期間、存在価値を示しながら、ワクワクを伝える場所をどこかに確保し続けなければならない。デメリットが大きく感じる。先ほどの文化財の話と休館期間の話から、賛成はしかねる。

第13回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員  
(敬称略、五十音順)

所 属	職	氏 名	備 考
株式会社h a k u	代表取締役	菊地 辰徳	
北海道大学	名誉教授	北村 清彦	
北海道教育大学釧路校	教 授	佐々木 幸	
北海道大学大学院文学研究院	教 授	佐々木 亨	
前札幌芸術の森美術館	館 長	佐藤 友哉	

○ 事務局

所 属	職	氏 名	備 考
北海道教育庁	生涯学習推進局長	山崎 義一	座長
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課	課 長	菅野 泰之	
	道立近代美術館担当課長	佐藤 昌彦	
	課長補佐	田中 猛之	
	係 長	佐伯 圭介	
	主 任	宮下 直之	
	主 任	中林 恭良	
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也	
	学芸副館長	中村 聖司	
	総務企画部長	熊澤 栄司	
	学芸部長兼学芸統括官	村山 史歩	
	総務企画課長	富田 拓貴	